

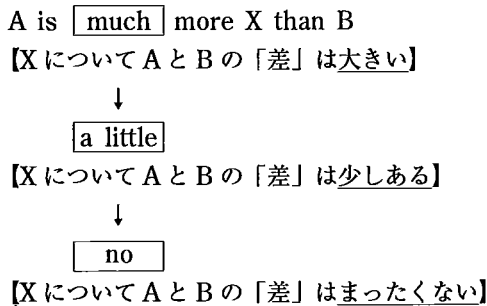
# 英文の読み方を考えるⅢ

## — “クジラの公式” 再検証 —

平井 正朗

### Ⅰ. “クジラの公式”

“受験英語”には「クジラが魚でない」ということを「馬」を引き合いに出して言説化した“クジラの公式”(→ A whale is **no more** a fish **than** a horse is. 以下、クジラ文)というものがある。これは「馬が魚でない」という周知のトピックを明示しつつ、それを前提に no more ~ than... で表した場合、「クジラが魚であることもそれ以上に絶対にありえない」→「クジラが魚であると言うことは、馬が魚であると言っているのと変わらない」→「クジラが魚でないのは、馬が魚でないのと同じだ」→「クジラは馬と同じように魚ではない」になるという談話情報を盛り込んだ絶対的次元での比較表現である。“クジラ文”理解のプロセスとして、「差」を表す程度の副詞を付加した文の一種と考えるとわかりやすい。



“クジラ文”では、no を使うことによって a fish であるかどうかという A と B の「差」がゼロになり、A whale = a horse の関係が成立する。さらに more ~ が「~以上」を表すものの、常識の範疇において a horse ≠ fish であるため、「クジラは馬と同じように魚でない」と訳出することになるのである。

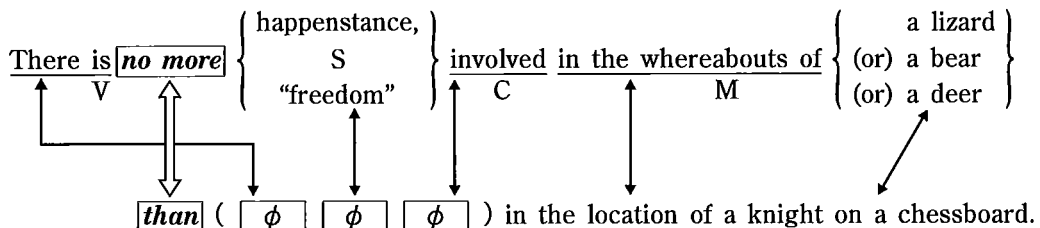
(01) An animal inhabits its space, whether in a zoo or in the wild, in the same way chess pieces move about a chessboard. There is **no more** happenstance, **no more** “freedom”, involved in the whereabouts of a lizard or a bear or a deer **than** in the location of a knight on a chessboard.

(大阪外大, 04)

(動物は、動物園であろうと野生であろうとチェスの駒が盤の上を動くのと同じように、その空間の中で生息する。トカゲやクマやシカの居場所には、チェス盤のナイトの場所と同じように、なんの意外性も“自由”もないのである)

(01) では「動物の居住空間」に焦点をあて、「チェスのナイト ≠ 移動性 ⇒ 限定された居住空間」と同じように「トカゲ、クマ、シカ ≠ 移動性 ⇒ 限定された居住空間」であることが言説化されている。文構造を解析すると下図のようになる。

《(01)構造図》 ⇒【テキスト内情報】:「トカゲ、クマ、シカの居住空間は限定されている」



⇒【テキスト外情報】:「チェス盤のナイトの場所は限定されている」

(02) And if rational examination revealed that we had been unfairly treated by the community, philosophers recommended that we be *no more* bothered by the judgement *than* we would be if we had been approached by a confused person bent on proving that two and two amounted to five. (京都大, 06)

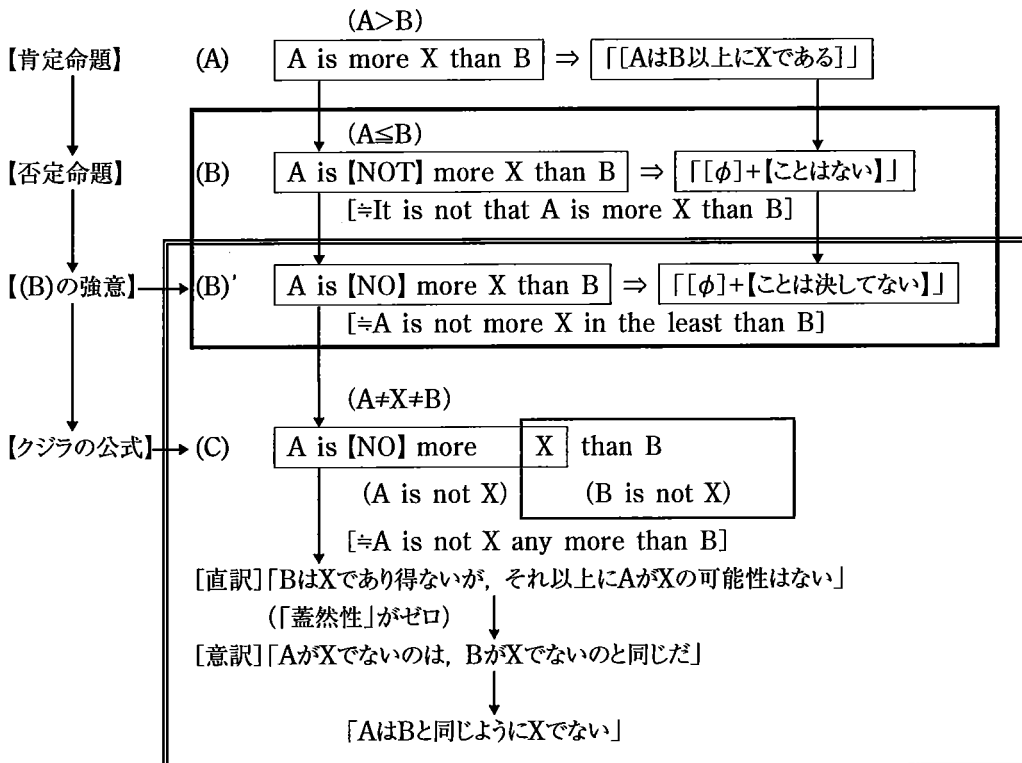
(もし合理的に検証することで、私たちが社会から不当な扱いを受けてきたことが明らかになった場合、 $2 + 2 = 5$ であるということを証明しようと躍起になっている頭の混乱した人物が近づいて来たとしても私たちがそれに煩わされることのないのと同じように、私たちは社会のそうした判断に煩わされるべきではないのだ、と哲学者たちは提唱したのであった)

(02) では *than* 以下に仮定法過去 *we would be* (bothered) と仮定法過去完了 *if we had been* approached by a confused person bent on proving that two and two amounted to five が内在したものになっている。「 $2 + 2 = 5$ であることを証明しようとするような人はいないが、たとえ

もしそのような人がいてもそれに煩わされるような人はいないだろう」という深層情報を読み取るだけではなく、「哲学者たちが提唱しているのは、 $2 + 2 = 5$ であるということを証明しようと躍起になる人がいても私たちがそれに煩わされるようなことはないし、それ以上に私たちが社会から不当な扱いを受けてきたという判断に煩わされるべきではないということである」という「クジラ文」の原義を読み取りたい。

相対的次元の比較表現である *A is not more X than B* との差異は、*not* が文の命題を否定するのに対して、*no* は *A* を主体とする文 (*A is X*) と引き合いに出された *B* の文 (*B is X*) の両方を否定することにある。この場合、「蓋然性」がゼロである  $B \neq X$  を前提とし、通例、*B* には読み手の<テキスト外情報>となるトピックが *negative* な視点で描写される。

(03) Short words, too, are read in four-tenths of a second. Since it takes *no more* time to read a short word *than* a single letter, the word is certainly not read by



spelling it out. (鹿児島大, 01)  
 (短い語もまた0.4秒で読まれる。短い語を読むのは、ただ1文字を読むのより時間がかかるわけではないので、語は確かに1字1字読み取ることによって読まれているのではない)

A is no more X than B = 「AはBと同じようにXでない」とパターン化されがちであるが、A is not more X than Bの「強意」として原義に基づく「AはBに比べて決してXでない、AがXだとしてもせいぜいB程度だ」の意味が生成されることにも留意し、contextから訳し分けられるようにしたい。

(04) But when the masters were shown a board consisting of randomly arranged pieces that did not represent a meaningful game situation, they could remember *no more than* the beginners.

(東京大, 04)

(しかし、名人が意味のある試合の状況を示していない、駒がでたらめな位置に並べられた盤面を見せられたときは、初心者程度しか覚えることができなかった)

(04) では「記憶量」に焦点をあて、「初心者の記憶量」と「名人の記憶量」の「差」がないことを言説化している。

Xに相当する形容詞が1音節の場合、読解過程では、<no more X than ~> = “クジラ文”，<no + X + er than ~> = “強意”の否定を想定すればよいが、あくまでも意味決定はcontext次第である。(クジラ文は、<no + X + er than ~>の拡張型と考えてよい)

(05) I have an old-fashioned taste for walking sticks, and I buy them frequently, but *no sooner* do I pay a visit to a friend's house or go on a journey in a train, *than* another stick is on its way into the world of the lost. (福岡女子大, 02)

(私は古風にもステッキの愛好者なので、頻繁に購入するのだが、友達の家を訪問したり、列車に乗って旅に出かけたりするや否や、また別の1本のステッキが忘れ物の世界へと旅立つ)

(05) の no sooner ~ than... は、大学入試では、否定の副詞句 No sooner を文頭移動させた強制倒置である <No sooner had + S + P.P. ~ than... > の型が選択問題や整序問題で出題されることが多いが、原理もわからず、“機械的”な暗記に偏りすぎると“英語嫌い”を助長する要因になりかねない。A is no sooner X than B の場合、「AはBに比べて決して時期が早いということはない」という原義から「AはBと時期が少しもかわらない → AはBと同じ時期 → AするとすぐにB」という意識が生まれることを理解したい。

(06) One of the key goals of my writings is to alert Asians that they have had *no better* historical moment *than* the present to develop their true potential and, at the same time, to encourage them to be bolder in their ambitions and dreams. (東京大, 03)

(私の執筆の大きな目的の一つは、アジアの人に対して、彼らの真の潜在意識を伸ばし、同時に野心や夢に関してもっと大胆になるように勧めるのに、今よりよい歴史的瞬間はないと警告することである)

(06) は“強意”の否定の事例である。

(07) We do *not* know how art began *any more than* we know how language started. (京都工繊大, 05)

(我々は言語がどのように始まったかわからないのと同じように、芸術がどのように始まったかわからない)

(07) の A is not X any more than B 「XについてAはBよりいささかでも大ということはない」は、XについてAはBに「差」を表す副詞 any (zero 以外なら「何でも、どんなものでも」) を付加した B + any の否定命題である。数量関係を記号化すると  $A \neq B + \text{any}$  であるから結果的には  $A = B + \phi$  ということになり、意味上  $A = B$  が生成され、A is no more X than B と同義関係になる。

(08) He, too, had money in his hand, but it looked to be *no more than* five dollars

or so, at the most. (宇都宮大, 01)

(彼もまた手にお金をもっていたが、それはせいぜい5ドルぐらいにしか見えなかった)

no more than + 数詞は、no が「差」がない表現であるから数量的には = 関係となるが、肯定命題である more than ~ を打ち消した主観的で negative な視点が生成されることから <少ないイメージ> の「たった~」(≒ only ~) の意味が生まれる。現代英語では、(08) のように not more than ~ の意味で生成されることもある。

(09) In a well-designed system, the components are black boxes that perform their functions as if by magic. That is *no less* true of the mind. The faculty with which we ponder the world has no ability to peer inside itself to see its own mechanism. That makes us the victims of an illusion: that our own psychology comes from some divine force or almighty principle. (京都大, 00)

(うまくデザインされたシステムでは、構成要素はまるで魔法のようにその機能を果たす黒い箱である。そのことは精神にもあてはまる。我々が世界について熟考する能力は、それ自体の内部をのぞき込み、それ自身の仕組みを見するという能力をまったくもっていない。そのために我々は錯覚に陥ってしまうことになる。我々自身の心理が何らかの神聖な力、ないしは全能の原理に由来している、という錯覚である)

“クジラ文”の裏命題としてよく *A whale is no less a mammal than a horse is.* という例文が引用される。基本原理は、*B is X* という「真実」を例に出し、*A is X* の「真実」もそれに劣ることはなく、それと同様「真実」であると言っているのだが、ここでは否定の副詞 *no* の機能が *X* に対する *A* や *B* の negative な視点を打ち消し、positive な視点から両者に「差」がないことを表出している点にも注目したい。(09) では context の結束性から *That is no less true of the mind* の後に *than of a well-designed system of the body.* が省略されていると考えることができる。なお、談話上、*A is not any less X than B* も生成可能であるが、産出される頻度はきわめて少ない。

## II. 指導事例の研究

— (“クジラ文”を板書してから) これは“クジラ”の公式といわれる有名な文で「クジラが魚でない」ということを「馬が魚でない」という例をあげて説明したものです。(A whale の下に A, no more と than を赤チョークで囲み、a fish の下に X, a horse の下に B と書き込んで) *A is no more X than B* ときたら *A is not X.* と *B is not X* の文がくっついたものだと考えればよいでしょう…。

これは教育実習生 A の解説である。一見、明快であるが、最初から *A is no more X than B* が“クジラの公式”という何か特殊な意味をもつ文構造であるかのような雰囲気を与えるだけでなく、*A ≠ X ≠ B* を自明のこととして提示しているため、<テキスト外情報> を利用し、原義に基づく意味の類推という点で問題が残る。この方法だと生徒は *A is no more X than B = “クジラの公式”* というイメージが強制的に長期記憶に保存されてしまうため“強意”の意味で用いられる context を見分けることができなくなるというデメリットがある。次は B 先生のものである。

— 「このミカンはあれよりおいしい」と英作してごらん。(皆が書き終わったところを見はからって) *This orange is more delicious than that one.* だね。では次にそれを否定文にして和訳してごらん。(少し間を置いて) *This orange is not more delicious than that one.* だね。訳は「このミカンはあれよりおいしくない」だよ。わかる？(反応を見ながら) では *not* を *no* にしたらどのような意味になるのかな？(様子を見ながら) 違いは *no* と *not* の違いだけだよ。*no* は *not* の強い否定だから「このミカンはあれと比べてちっともおいしくない」という意味と「このミカンはあれがおいしくないのと同じくらいおいしくない」という意味もあるんだ。後の方は「富士山が爆発したって入試がなくなることはないと思うよ」みたいになりそうもないことを例に出して、否定的な意見を強調する言い方がベースになっているんだ。*A whale is no more a fish than a horse is.* の場合でも「馬が魚である」わけな

いの中から「クジラが魚であると言うなら、それは馬が魚であると言っているのと変わらない」、つまり「クジラは馬と同じように魚でない」となるのだよ、わかるだろ…。

B先生の場合、まず優等比較 more ~ than... から導入し、その否定文の形と意味を確認してから not と no の違いを説明しつつ、原義に基づく no more ~ than... の訳を提示、“蓋然性”がゼロの比較対象の場合、“クジラの公式”になると教えている。リーディングの授業ではこのような原義に基づく段階をおった説明が直読直解につながるのではなからうか。

### 参考文献

- 伊藤和夫 (1977) 『英文解釈教室』 (研究社)  
岡田伸夫 (2001) 『英語教育と英文法の接点』 (美誠社)  
高橋善昭 (1986) 『英文読解講座』 (研究社)  
平井正朗 (2007) 『誤訳分析Ⅱ—否定比較表現について—』 (京都文教研究紀要第12号)

(京都文教中・高等学校教諭)